

こども農家



まほろば主人

宮下 周平

(仁木農場より)

ああ、こどもが、こどもたちが……。今、行き場がない。やり場がない。逃げ場がない。

こども一人ではどうにもならない。

どうしようも出来ない。

どこへ行ったらいいの？

どうしたらいいの？

立ちすくむ子。

引きこもる子。

死をみる子。

親は、どう生きているのか。

こどもは、親を見ている。

こどもは、親に従うしかない。

一、枕もとで

幾晩も幾晩も起こされた。
何故か息苦しい。

苦しい。苦しい。

助けてよー。助けてよー。

死んじゃうヨー。

その声に、ハッとうなされるように目が覚めた。
これは、確かにこどもの声だ。

それが、毎晩毎晩、耳元でささやくのだ。

最近、それで幾分、不調なのだ。

滅入るように、一日どんよりした気分になる。

これは、ただことではないな。

訴えのように、なんとも悲しかった。

これは、何をしようと、

何をさせようと、しているのか。

二、援農の子

援農に来られるお子さんを見ると、
農園が結晶化、完結化する思いがある。
何故だろう。不思議だ。



この子たちの中には、
学校に行っていない子もいる。

もちろん、マスクなし。ワクチンなし。

吸い付くように、大地をほう。

「ギャッキヤ」と、はしゃいで、

一日中、駆けまわり、走り回る。

元氣、元氣、疲れを知らない。

大地のエネルギーをダイレクトに受けて、

作物の勢いそのもののように、グングン伸びる。

これまで、大人目線で、なんでも見て来たが、

こんどは、こども目線で見てみる。

すると、全ての発想、全ての結果が、

スルリと入れ替わる。

こどもからスタートする。

こどもをゴールとする。

すると、今まで見えて来なかった全体が見えてくる。

そこで、村作りの原点を、

こどもを主人公に置き換えてみた。

そこから出発すると、物事の終始が、

パーッと太陽が輝くように、光り始めた。

この世を託するもの、

この畑を遺すのも、

この子どもたちしかない。

何よりも、後回し、事のついで、

大人の尻っぱ、尾っぱだったものが、

後先を逆さにしてヒーロー、ヒロインになると、

未来への道筋が見えて来た。

スゴイ！ぞー！！！！

三、自然に任せる

こどもは仕事が好きだ。

あれやって、これもやって、と言うと、





「ハイハイ！ハイー！」
 と言って、飛びつく。
 とにかく、うれしいのだ。
 仕事することが楽しいのだ。



この世で、はじめて経験する作業もなんのその。
 眼を輝かせて、なんでもこなす。
 大したものだ。
 少々飽きっぽいのが、付いていてやると、どこまでもやる。

どこまでも、自然がくっついて来る。
 どこへでも、自然に向かっている。

天然の教師がマンツーマンで、教え諭し導いている。

なんで、そこに人間の手が必要だろうか。

大人は、そこにソット置いて来るだけでいいんだ。

あとは、成るように任せる。
 見守るだけでよい。

昔、老子という偉い先生が、言っていたネ。

「無為にして化す」って。

何もしなくても、ほっといて、成ってしまう、ということだ。
 心配しなくても、大自然に身をあずけることさ。

人生のコツは、

ただその一点だけなんだ。

あとはボンコツ、ガラクタ。

四、仕事のコツと自然の秘密

まほろばの夢は、

自給の山里を作ること。

でも、それより先に、

全国の教室からあふれる出る、こぼれ出る

こどもたちの遊び場、仕事場を作りたいんだ。

この農園を開放したいんだ。



農学校がイイな。
 土仕事、畑仕事、山仕事、大工仕事、何でも出来る人に育ってもらいたい。

宮澤賢治の農学校を思い出すな。

鉱物も、天体も、肥料設計も、チェロも、文学も、南無妙法蓮華経……も、

なにもかも取り込める宇宙的人格に育って欲しいな。

イーハトーヴ、ポラーノ、フランドン、カンパネーラ……
 ……今でも新鮮な語彙は、
 星空のまたたきのよう……。

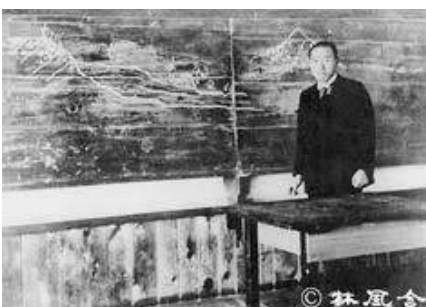
勉強は、「よみ・かき・そろ

ばん」くらいいいんだ。

単純なことを繰り返すことで、あと

あと不思議な力が授かる。

体力が付けば、猛烈に向学心と興味が芽生えてくる。



スポンジのように、全方位的に水を吸収しまくるんだ。
要は、仕事のコツさえつかんでいれば、勉強なんて、朝飯前さ。オチャノコサイサイ、ヘッチャラチャラの助なんだ。

世の中の要領も、農作業の要領も同じで、どうすれば、どうなることは、やる前に見えて来るもの。どうなるかを、どうすればよいか、とにかく体験がものをいう。それは、歳に関係ない。こども体験で、すでに身につけられるんだ。ハイカラな知識やハナヤカな技術なんていらない。



栗の大木に、ブランコをかけ、すみ家を作ろうと設計図をみんなで描いた。

物事が成って行く原理を、体に覚えさせるんだ。これが、自然の秘密を解き明かすことなんだ。それこそが、簡単便利な最高のノウハウさ。自然は、何たって最高の先生、何でもかんでも知っているんだ。

五、怖い怖い今

マスクを外すと、仲間外れにされ、ワクチンを拒否すると、学校に行けなくなる。

マスクの顔には、おびえた目、悲しい目、暗い目、みな目が死んでいる。



マスクを外して思いつき走り回ることも、飛ぶことも、ボールをけることさえ出来ない。みんなが見てる。先生が見てる。町が見てる。

怖い。何もできない。金縛りにあったように、何もできない。

家でゲームしかない。没頭するしかない。その先は、虚無感。虚しい。そして、体から失われる健康。そして、自然が消えて行く。

六、今を脱出せよ！

そんな子たち、みんなおいで。ここは、気持ちいいぜ。楽しいぜ。



マスクも、ワクチンも、
要らない、要らない、全く要らない。
そんなもの嘘だよ。冗談だよ。

ここは、あなたの遊び場。
あなたの家。
あなたの寝床。

よく帰って来たね。
ホント、ホント、ホントに。
よく帰って来たヨ。
ここは、ふるさと。
あなたの家里。

いつまでも居てもいいんだよ。
帰らなくてもいいんだよ。
おモッキリ遊んで、
おモッキリ働いて、
おモッキリ食べて、

おモッキリ寝て、
その繰り返しでいいんだ。
簡単、簡単。

テストもなければ、通知表もない。
いいでしょう。

お爺さんも、お婆さんも、そんなだったたら、
もう一度、こどもの昔に戻って、
やり直したいなーーーー。

七、フリースクール、イイね!!

野生動物学者・坪内
俊憲先生が来園して、
開口一番、

「こどものためのフリ
ースクールを作ろう
よー!」
と呼びかけて下さった。

「やったー!」

そこで、スパークした。
お互いの火花が散っ
た!

本当に、思いはその通
り。
先ず、こどもたちを救
わねば、



この国はなくなってしまう!!!
こどもたちの

逃げ場を作れ。

憩いのスペースを作れ。

安らぎの山里を作れ。

それが、国の核となり、
それが、これからの礎となる。

こどもたちを、
眠らせよ。

こどもたちを、
休ませよ。

こどもたちを、
あそばせよ。
おモッキリ!

国の宝なるこどもを、
守る事こそ、
あなたたち、わたしたち、
大人のつとめです。

八、その方法

難しい小理屈はいらない。
カネのかかる建物も要らない。



遊ばせるんだから、
学校なんて要らないんだ。
広い外が、学校さ！！！！！
あの空は天井。

あの山は壁。
この草草は机。
この鋤は、鉛筆さ！！！！
そうか、このお爺さんも気付いたね。
この「〇〇自然農園」じゃなくて、
「こども農学こう」がいい！！！！
眠るところや、食べる所は、
これから一緒に作ろうや！！
夏は、青空学校だね。
冬は、大雪学校だね。
雪ダルマ、作り放題だよ。
カマクラも、トンネルも作り放題。
あつ！そうだ、雪祭り出来るね。
いいなー。
みんな寄っておいで。
みんなでお祭りしよう。
そうだ、外で食べモノ食べたら、
どんなにか美味しいか、楽しいか。
川べりもある、野ッパラも広いし、
毎日毎日キャンプも出来るし、
火を起こそ、起こそ。
焚き木を採りに行こう、行こう。
いいでしょ。
いいでしょ。



九、親の覚悟

こどもの幸せを願わずにいられない。
親なら誰しも、思うもの。

あなたなら、どうします。
このままでイイですか？
このままこどもを枯らせてイイですか？

もう、世の中は壊れています。
人もみな壊れかけています。
学校も崩壊寸前です。
都会は廃墟になってしまいました。

そんな所に、大切なこどもを送り込めますか。
こどもの将来を託せますか、預けられますか。

そこで、提案！！

こどもさんと一緒に飛び込む。

自然の中に、家族で飛び込む。

月一回でも、週一度でも、

こどもと自然と戯れる。

裸足で土を踏みしめる。踏ん張ってみる。

子育てに悩むことなんか、要らなかった。

自然の中に、一緒に飛び込もう！！

自然はあなたの味方。

親身になって心配してくれる

一番の相談相手です。

答えは、その中にアル！！

きつとアル、

必ずアル。

自然は、

首を長くして、

温かく、

待っていますよ。

あなたたちの帰りを。

十、提言…《全国「小国寡民」運動》

「親子援農」「家族就農」の道

①日本の現状

農水省の2020年農林業センサスによると、
この5年間で「農業従事者」は、22・4%（39万人超）
減少で136万人。

「平均年齢」67・8歳 65歳以上が約70%を占める。

2025年には、団塊世代75歳以上の後期高齢者。

日本人口の1%未満100万人を切る。

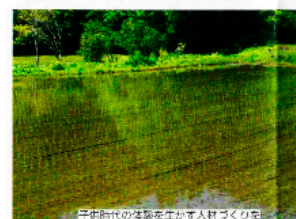
経営農地30アール以上、農産物販売総額50万円
／年以上（『コロナと生きる』49p「五、子孫のため

週刊 事実報道

2021年
6月17日(木)
314号
発行所
〒520-0011
大阪府大阪市東淀川区4-9-2
電話 06-6397-3113

もっと知りたい人！
るいネット
ネット上での
情報交換は、
http://www.rui.jp

どうする？ 農漁業の活力再生



子供の外遊びと「援農」をつなぐ

農漁業や漁業への転換に関心を持つ
いる人は増えてきているが、農漁業人
口全体は減り続けている。このままでは
農漁業は持続可能な産業として維持
再生化のためには若い世代からの
「参加」が必要だ。ではどうすれば
いいか。

●成年の就農定住施設とつながった、平均年齢
67・8歳、65歳以上の高齢者が中心
の100人を超える世代は、農漁業人
口全体は減り続けている。このままでは
農漁業は持続可能な産業として維持
再生化のためには若い世代からの
「参加」が必要だ。ではどうすれば
いいか。

本世代人材の確保
や雇用事業に資する
施設整備と交付金
はかなりの厚みとな
っているが、就農への
井の動機付けが全
く無効なわけではない
だろうか。財政運営
の投入額を減らして
いく従来の農漁業
施設では、農漁業セ
ンサスが発表された
2020年度「入居者数
時代」は留保的な

に美田を買うべし」から。参照)

②打開策

最早、日本の農業政策は、成年の就農定住施策
では手遅れ。

これからは、こどもの教育にかかっている。

・こどもの外遊びを「援農」につなぐ。

実際、この5年間で、農民が40万人減少の下降線を辿っているが、この山村留学が5年前に比べて、10%増えているという事だ。

これは、希望の光である。

③ 具体的方向

まほろばでも援農運動で 家族援農が動き出している。

学校や家庭、近所もコロナで閉塞された日常を、嬉々として突破出来るのが、唯一農業だ。それも親子家族で一緒にあって、野菜作りに励む時間と空間。それが援農で、きつかけ作りになる。まほろば農園でも、数件の親子連れの援農部隊が、頼もしく、面白く一日を過ごしている姿を見て、本当にイイナ、と感動してしまいます。

より強い親子の絆、より深い自然への理解が、まず第一歩です。



④「懐しき未来」つくりに向けて

将来 まほろば自然農園と㈱まほろばでは、この受け入れ体制を整えて、理解者・賛同者を募えたらいいな—って思っています。農園やまほろば一人では出来ません。

そのお父さんお母さんが中心となって立ち上が

り、各地でこんな農学校ができれば、どんなにか素晴らしいことでしょう。

いつか、「懐しき未来(さと)」
作りで、農学校が開校される
日を夢見ます。



ご意見やご感想があれば、
どしどしお寄せください。

まほろば編集部にお寄せただけです。

コロナ禍で苦しんでいる
こどもさんを、何とか一日
でも早く、一人でも多く、
救っていききたいとの思いで、
文章を書いてしまいました。
はやる気持ちの急ごしらえ
で、不十分なところ、お許
しください。

お読みいただき、ありがとうございます。
 とうございました。

「親子一緒に過去最多

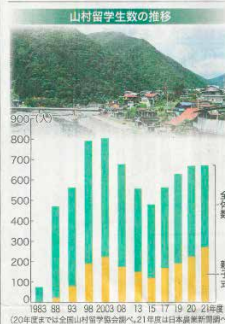
「田園回帰」追い風
自治体は移住期待

本紙調べ

山村留学に新潮流

農村や離島の公立小中学校で学ぶ「山村留学」は、近年に新しい顔貌が生まれている。2005年以前は「平成の大学」をビギンに減少していたが留学生が、5年前から増加に転じた。新井トコウシ（トコウシ）氏の2010年調査に基いて、山村・離島の「留学」が過半数となる見通しだ。子育て世代のライフスタイルの変化が背景にあるとみられ、地元の子どもだけでは学校を卒業できない、地域と自治体とのつきり関係を断つて受け入れを模索している。（栗田博一）

▶ 2面にインタビュー



2021 年 6 月 30 日付け『日本農業新聞』より